PROMCODE

次世代プロジェクト管理データ交換アーキテクチャ協議会

富士通における実証実験報告書

第 1 版

2013 年 10 月 22 日

富士通株式会社

Copyright © FUJITSU LIMITED 2013 All rights reserved.

本書は，本書に記載した要件・技術・方式に関する内容が変更されないこと，および出典を明示いただくことを条件に，無償でその全部または一部を複製，翻訳，転載，引用および公衆送信することができます．なお，全体を複製，翻訳，転載または公衆送信する場合は，本書にある著作権表示を明示してください．
本書の著作権者は，本書の内容に関して，その正確性，完全性その他一切を保証するものではなく，その利用等により生じた損害について，法律上の構成のいかんを問わずいかなる責任も負いません．

- Eclipse は, 開発ツールプロバイダのオープンコミュニティである Eclipse Foundation, Inc.により構築された開発ツール統合のためのオープンプラットフォームです。
- Oracle と Java は、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。文中の社名、商品名等は各社の商標または登録商標である場合があります。
- Microsoft, Windows, Microsoft Office および Excel は Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。
- その他、記載されている会社名、商品名、又はサービス名は、各社の登録商標又は商標です。

目次

1 目的 4

2 実証実験の内容 5

2.1 実証実験のシナリオと実行環境 5
2.2 実証実験に適用したデータ 6
2.3 プロジェクトモデルの設計 6
2.4 関連ソフトウェア 7

3 実証実験の結果 8

4 実証実験の評価 10

4.1 効果 10
4.2 課題 10

5 まとめ 11

6 参考文献 12

1 目的

富士通においては 2011 年に OSLC を基礎とするプロジェクト管理データの交換について実証を行っている．今回の実証実験では，この経験を踏まえ，次の 2 つの目的を設定した．

(1) 富士通における社内標準プロジェクト管理ツールから PROMCODE アダプタソフトウェアを介して Excel などの他の管理ツールへのデータ交換が可能であることを実証し，実プロジェクトへの適用性を評価する．

(2) この実証実験を通して，実際のプロジェクトへ適用する際の課題を解決する．

上記の目的に従って，次のような評価，検証項目を設定した．

(a) PROMCODE インタフェース仕様の妥当性と有効性

1) 現在運用している社内標準プロジェクト管理ツールのデータがすべて PROMCODE インタフェース仕様により表現できること．

2) 社内標準プロジェクト管理ツール個別のデータを扱えるように，PROMCODE インタフェース仕様で規定されたリソース定義が容易に拡張可能であること．

(b) PROMCODE アダプタソフトウェアの有効性

1) 社内のプロジェクト管理環境上で，PROMCODE アダプタソフトウェアが適用可能であること

2) 拡張されたリソース定義を適切に変換可能であること．

(c) 社内標準プロジェクト管理ツールデータの PROMCODE リソースへの変換アダプタソフトウェアの実装容易性

(d) PROMCODE 導入の容易性

2 実証実験の内容

2.1 実証実験のシナリオと実行環境

本実験で想定したシナリオは PROMCODE の「シナリオ 2」である．実証実験の環境とシナリオを図 1 に示す．シナリオは次のアクティビティから成る．

(1) ProjectWEB [1]を用いた社内でのチーム内の実績の報告

(2) 社内 PM ツールによるチームの管理データ収集

(3) 社内 PM ツールによるチームの管理情報の参照

(4) 社内 PM ツールのデータ定義から PROMCODE リソース定義への変換

(5) PROMCODE リソース定義から顧客／ユーザが管理する Excel のデータ形式への変換

(6) Excel によるプロジェクトの管理情報の参照

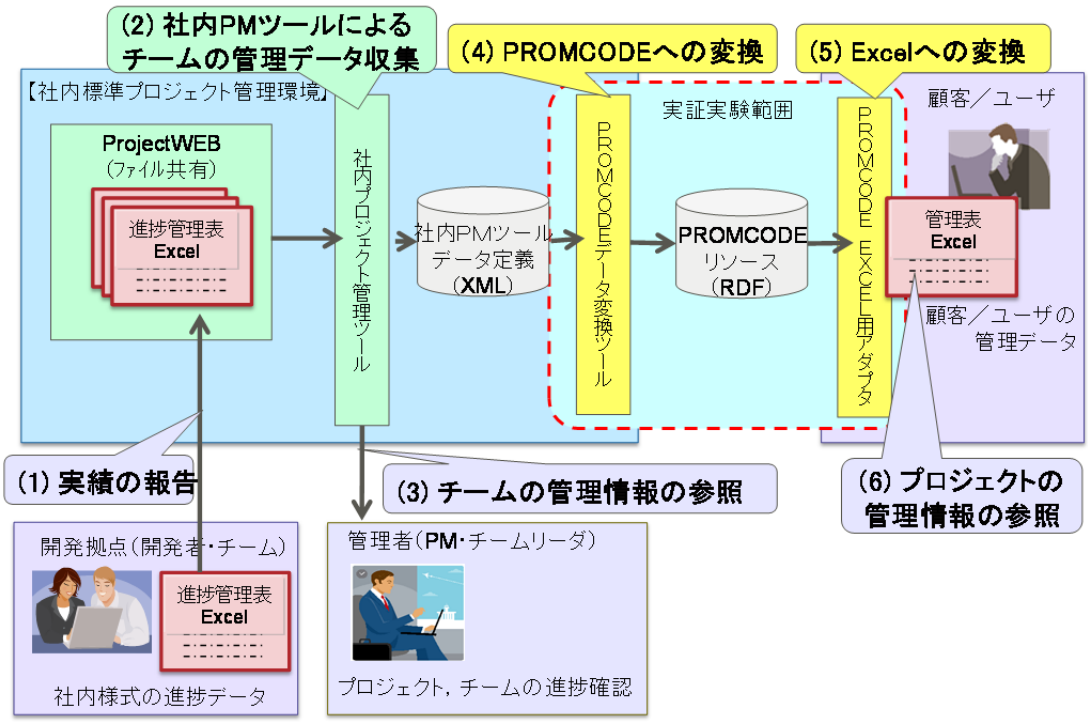


図 1　実証実験のシナリオと環境

2.2 実証実験に適用したデータ

実証実験に適用した管理ツールは製造系プロジェクト，流通系プロジェクトを中心に活用されている，実証実験に利用したデータは設計工程，製造工程(プログラミング)の進捗管理データである．

2.3 プロジェクトモデルの設計

実証実験の対象とする社内標準プロジェクト管理ツールから PROMCODE インタフェース仕様書が規定しているドメインモデルに基づきリソース定義へ変換する．顧客／ユーザは，このリソース定義から必要な管理データを抽出できる．

プロジェクト管理ツールで規定している進捗管理データの情報項目を，PROMCODE ドメインモデルの WorkItem のサブクラス群にマッピングする．さらに，社内標準プロジェクト管理ツール固有の管理データに対して，サブクラスを追加し，これらのサブクラスの属性として，必要な情報項目を追加した．

対象とするプロジェクト管理データと PROMCODE ドメインモデルへのマッピングを図 2 に示す．

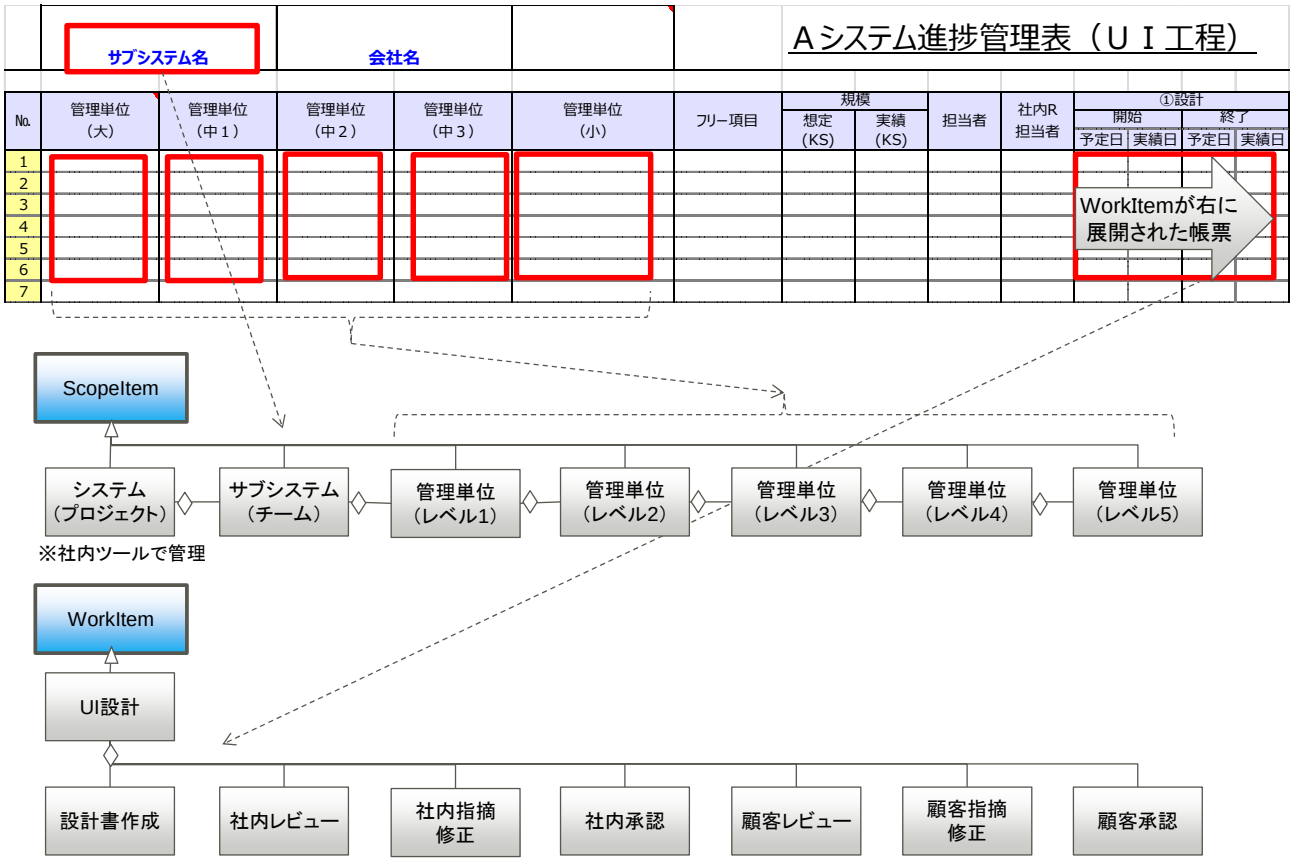


図 2　実証実験の対象とするプロジェクト管理データ

2.4 関連ソフトウェア

本実証実験において，開発，および，設定変更を行ったソフトウェアの一覧を表 1 に示す.

表 1 実証実験における開発，設定変更ソフトウェア一覧

No	ソフトウェア	開発言語	説 明
1	PROMCODE データ変換ツール	Java	社内標準プロジェクト管理ツールのデータを PROMCODE リソース定義へ変換.
2	PROMCODE アダプタの設定変更	ー	PROMCODE アダプタソフトウェアに対し，Excel で必要なデータのみを抽出するよう設定を変更した.

3 実証実験の結果

実証実験の結果を下記に示す.

(1) PROMCODE インタフェース仕様書の妥当性と有効性

1) 現在運用している社内標準プロジェクト管理ツールのデータがすべて PROMCODE インタフェース仕様書により表現できること.

社内標準プロジェクト管理ツールのデータの中で，PROMCODE ドメインモデル仕様書で規定されている範囲のデータはすべて PROMCODE リソース定義に変換可能であった.

2) 社内標準プロジェクト管理ツール個別のデータを扱えるように，PROMCODE インタフェース仕様書で規定されたリソースが容易に拡張可能であること.

社内標準プロジェクト管理ツール固有のデータは PROMCODE のリソース定義を拡張して変換可能であった.

これにより，社内標準プロジェクト管理ツールのすべてのデータを PROMCODE のリソース定義を介して，PROMCODE インタフェース仕様書に準拠するツール，あるいは，Excel に人手によらず変換可能であることを確認した.

(2) PROMCODE アダプタソフトウェアの有効性

1) 社内のプロジェクト管理環境上で，PROMCODE アダプタソフトウェアが適用可能であること

Eclipse Lyo で提供されている PROMCODE アダプタソフトウェアにより，社内標準プロジェクト管理ツールのデータから変換された PROMCODE リソース定義を，通常，顧客／ユーザが管理に使用している Excel のデータ形式へ変換できることを確認した.

2) 拡張されたリソース定義を適切に変換可能であること

拡張されたリソース定義については，顧客／ユーザが指定した範囲で，PROMCODE アダプタソフトウェアにより管理データを抽出し，変換できることを確認した.

(3) 社内標準プロジェクト管理ツールデータの PROMCODE リソースへの変換アダプタソフトウェアの実装容易性

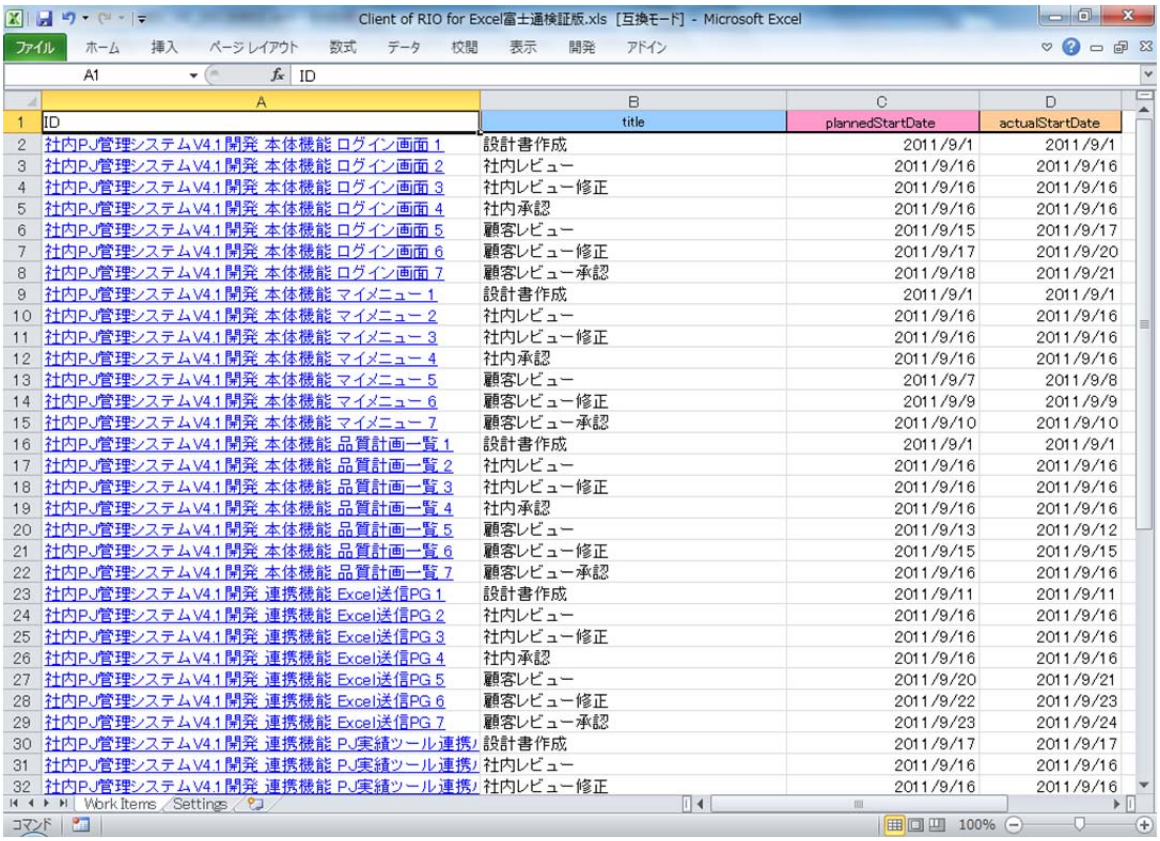
(4) PROMCODE 導入の容易性

PROMCODE アダプタソフトウェアをはじめとする PROMCODE の技術は社内標準プロジェクト管理環境で容易に運用可能であることが確認できた.

これによって，社内標準プロジェクト管理ツールと顧客／ユーザの管理環境との連携が図れ，プロジェクト管理の標準化を推進できる.

図 3 は社内標準プロジェクト管理ツールのデータを，今回の実証実験で開発した PROMCODE データ変換ツールにより, PROMCODE リソースへ変換した結果の例を示す. これを, さらに PROMCODE Excel 用アダプタにより Excel に変換した結果を図 4 に示す.

図 3　社内標準プロジェクト管理ツールから PROMCODE への変換結果



ID	title	plannedStartDate	actualStartDate
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_ログイン画面_1	設計書作成	2011/9/1	2011/9/1
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_ログイン画面_2	社内レビュー	2011/9/16	2011/9/16
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_ログイン画面_3	社内レビュー修正	2011/9/16	2011/9/16
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_ログイン画面_4	社内承認	2011/9/16	2011/9/16
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_ログイン画面_5	顧客レビュー	2011/9/15	2011/9/17
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_ログイン画面_6	顧客レビュー修正	2011/9/17	2011/9/20
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_ログイン画面_7	顧客レビュー承認	2011/9/18	2011/9/21
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_マイメニュー_1	設計書作成	2011/9/1	2011/9/1
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_マイメニュー_2	社内レビュー	2011/9/16	2011/9/16
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_マイメニュー_3	社内レビュー修正	2011/9/16	2011/9/16
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_マイメニュー_4	社内承認	2011/9/16	2011/9/16
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_マイメニュー_5	顧客レビュー	2011/9/7	2011/9/8
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_マイメニュー_6	顧客レビュー修正	2011/9/9	2011/9/9
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_マイメニュー_7	顧客レビュー承認	2011/9/10	2011/9/10
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_品質計画一覧_1	設計書作成	2011/9/1	2011/9/1
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_品質計画一覧_2	社内レビュー	2011/9/16	2011/9/16
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_品質計画一覧_3	社内レビュー修正	2011/9/16	2011/9/16
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_品質計画一覧_4	社内承認	2011/9/16	2011/9/16
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_品質計画一覧_5	顧客レビュー	2011/9/13	2011/9/12
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_品質計画一覧_6	顧客レビュー修正	2011/9/15	2011/9/15
社内PJ管理システムV4.1開発_本体機能_品質計画一覧_7	顧客レビュー承認	2011/9/16	2011/9/16
社内PJ管理システムV4.1開発_連携機能_Excel送信PG_1	設計書作成	2011/9/11	2011/9/11
社内PJ管理システムV4.1開発_連携機能_Excel送信PG_2	社内レビュー	2011/9/16	2011/9/16
社内PJ管理システムV4.1開発_連携機能_Excel送信PG_3	社内レビュー修正	2011/9/16	2011/9/16
社内PJ管理システムV4.1開発_連携機能_Excel送信PG_4	社内承認	2011/9/16	2011/9/16
社内PJ管理システムV4.1開発_連携機能_Excel送信PG_5	顧客レビュー	2011/9/20	2011/9/21
社内PJ管理システムV4.1開発_連携機能_Excel送信PG_6	顧客レビュー修正	2011/9/22	2011/9/23
社内PJ管理システムV4.1開発_連携機能_Excel送信PG_7	顧客レビュー承認	2011/9/23	2011/9/24
社内PJ管理システムV4.1開発_連携機能_PJ実績ツール連携/	設計書作成	2011/9/17	2011/9/17
社内PJ管理システムV4.1開発_連携機能_PJ実績ツール連携/	社内レビュー	2011/9/16	2011/9/16
社内PJ管理システムV4.1開発_連携機能_PJ実績ツール連携/	社内レビュー修正	2011/9/16	2011/9/16

図 4　PROMCODE から Excel へ変換した結果

4 実証実験の評価

4.1 効果

実証実験から，次のような効果が確認できた．

(1) 社内でのプロジェクト管理の標準化の推進

社内のプロジェクト管理標準で規定している管理データを顧客／ユーザが求める管理データへ人手を介さずに変換可能であることが実証された結果，社内プロジェクト管理の標準化の推進ができる環境を実現できたと言える．

(2) 顧客／ユーザとのコミュニケーションの改善

顧客／ユーザに対してタイムリーに管理データを提供可能となったことにより，プロジェクト管理に関する顧客とのコミュニケーションの改善に寄与すると言える．

(3) パートナー企業におけるプロジェクト管理の負担軽減

パートナー企業においても，個別のプロジェクト管理規約やツール，環境を変更することなく，プロジェクト管理データが交換可能となることから，パートナー企業における管理の負担軽減を可能にすると言える．

(4) プロジェクト管理の一元化

組織やプロジェクト毎の管理データの差異を，PROMCODE インタフェース仕様を介して吸収できることにより．プロジェクト管理の一元化が実現できる見通しを得た．この結果，顧客／ユーザ，SI ベンダ，パートナーすべてにとって，プロジェクト管理の負担の軽減とタイムリーな情報の交換によるプロジェクトの可視化，リスクの軽減が可能になると言える．

4.2 課題

実プロジェクトにおいて PROMCODE の適用を拡大し，実績を積み重ねることにより，PROMCODE の普及を推進すると共に，実践からのフィードバックから運用方法とプロジェクト管理環境などの継続的な改善を図る．

5 まとめ

実証実験を通して，組織やプロジェクト毎の管理データの差異を PROMCODE インタフェース仕様を介して吸収できることにより．プロジェクト管理の一元化が実現できる見通しを得た．

この結果，顧客／ユーザ，SI ベンダ，パートナーすべてにとって，プロジェクト管理の負担の軽減とタイムリーな情報の交換によるプロジェクトの可視化，リスクの軽減が可能になる．

6 参考文献

[1] 村上 希，SE のビジネス基盤を目指す ProjectWEB の新たな取組み, FUJITSU, Vol. 60, No. 6, 2009 年 11 月, pp. 599-603, http://img.jp.fujitsu.com/downloads/jp/jmag/vol60-6/paper10.pdf.